「青野型甕」について

石崎善久

1．はじめに

1993年、岩滝町定山遺跡の発掘調査を担当する機会を得ることができた。この遺跡では飛鳥時代集落に伴う鍛冶遺構（ＳＸ02）とともに、祭祀に使用されたと考えられる多量の須恵器・土師器・ミニチュア土器・石製品などが一括して出土した。この一括資料の年代については共伴する須恵器の型式からＴＫ217古段階併行期と考え、良好な一括資料として評価した[注1]。この定山遺跡ＳＸ02出土遺物の中には極めて特徴的な形態を示す土師器甕が存在していた。定山遺跡の概要報告においては甕Ａとして分類したものであるが、これは丹後半島の在地産と考えられる一群の土師器とは容易に区別できる。

この種の土師器については、桑飼下遺跡[注2]での報告が初見であり、その後も由良川流域の遺跡の調査に伴い、出土数、報告件数ともに増加してきている。また、調査担当者の間では俗称「段々口縁甕」としてその存在は知られてきた。

しかし、現状でこの「段々口縁甕」に対しての研究は皆無であり、正当な評価がなされているとはいいがたい。これは、一括性の高い資料が少数であること、完形個体がほとんど確認されていないことなどが原因となっている。

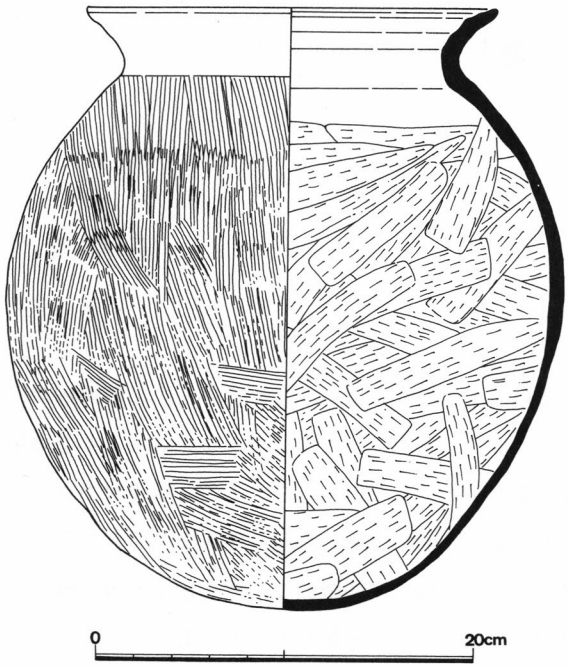
このようにこれまで、あまり注目されていなかった甕ではあるが、後述するように分布では極めて特徴的な分布状態を示し、この種の甕の発祥の地と考えられる綾部市綾中・青野遺跡のもつ重要性にも関わるものかと考えられる。

本稿は、これまで俗称「段々口縁甕」と呼ばれてきた甕をその出現地から「青野型甕」と呼称し、それに伴う土師器の組成ならびに分布状況を中心に述べることにより、この甕のもつ意義について考えてみたい。

2．「青野型甕」の形態・技法的特色

ここでは、「青野型甕」の形態的・技法的特徴について簡単に触れておきたい。

まず、形態的な最大の特色として口縁部にナデによる凹凸が認められ、ナデの状況からロクロを使用したのではないかと推定されることである。「青野型甕」出現以前の在地系



第１図　綾中遺跡ＳＢ8108出土「青野型甕」実測図
注19aより再トレース、一部加筆

の甕や丹後半島の在地系の甕をみてみると、口縁部は横ナデにより調整されているが、ロクロの使用を想定できるものではなく、「青野型甕」はロクロを使用することにより、口縁部を大きく引き延ばすことを目的としているものと考える。なおこの段については、口縁部内面につくもの、口縁端部内面のみにつくもの、口縁部外面につくもの、口縁部の内外面につくもの、頸部内面につくものなど、さまざまなバリエーションが存在する。

完形個体がほとんど存在しないため、全体のプロポーションについてうかがい知ることは困難であるが、大破片の資料や、少数の完形個体からみると、胴部は体部最大径を体部中位からやや下方に持つほぼ球形に近いものの他、長胴気味になる可能性のあるものも確認される。また、底部は丸底である。

技法的な特色をみると、体部外面には斜めもしくは縦方向のハケが施され、体部内面は横方向もしくは、斜め方向のケズリが認められる。この技法は、「青野型甕」に共通する技法である。頸部から口縁部にかけてはロクロによると考えられる横ナデにより仕上げられている。なお、個体によっては一次調整に体部内面・口縁部内面にハケの痕跡を残すものがある。

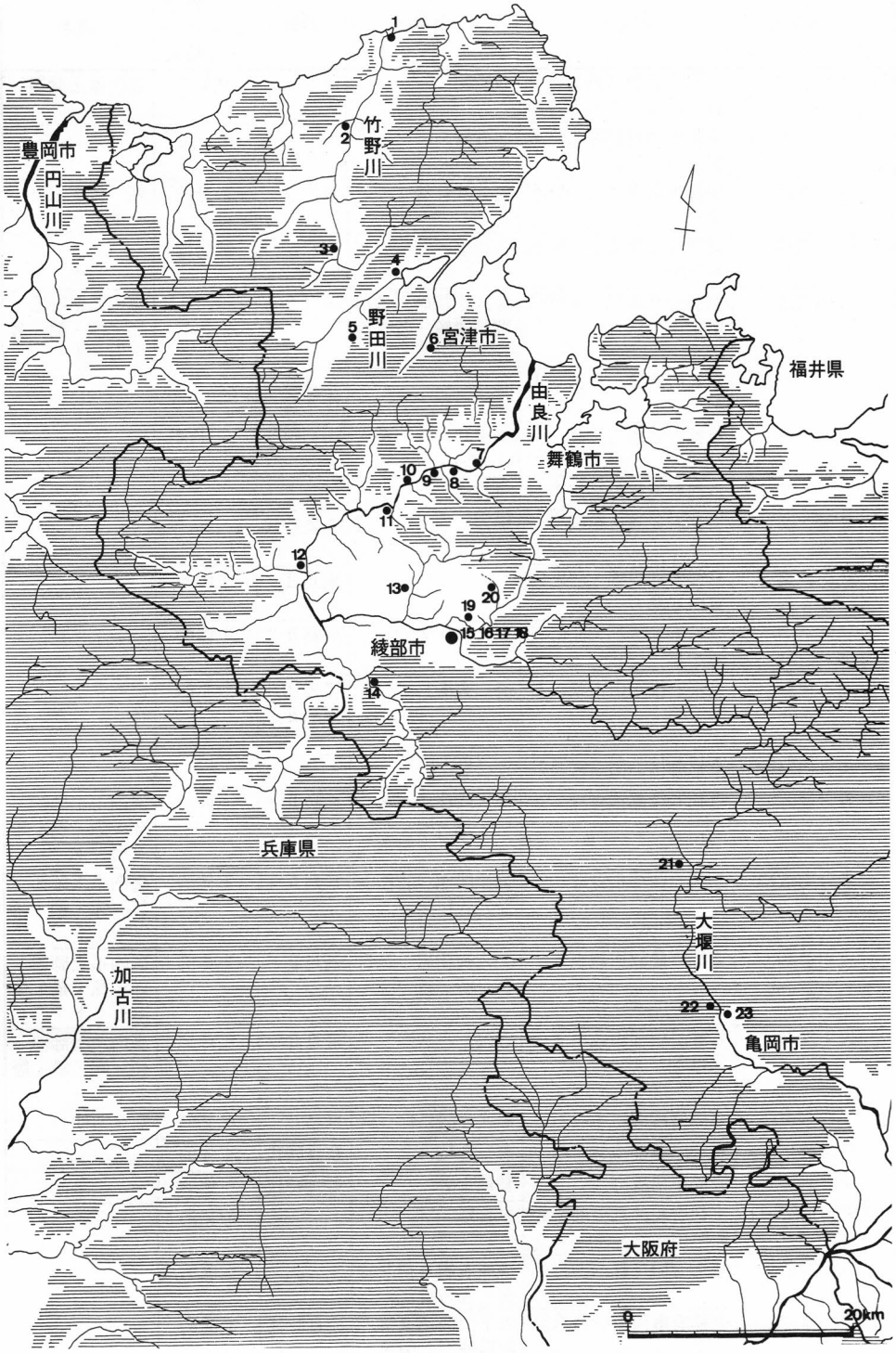
なお、「青野型甕」には、把手を持つものと、把手を持たないものの２種が存在する。(注3)

現状では編年的な検討を加えるには資料的制約が多いが、現在の所、新しいものほど口縁部が大きく外へ開き、胴部も長胴気味になる傾向があるものと考えられる。

３．各遺跡の概要と出土遺物

「青野型甕」が確認されている遺跡は付表および第２図に示すとおりである。

分布の状況をみると北は丹後町から、南は園部町まで京都府北部に広く確認されている。



第２図　「青野型甕」出土遺跡分布図(番号は付表に対応)

付表　「青野型甕」出土遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	遺構	時期	「青野型甕」の占める位置	備考
1	竹野遺跡	京都府竹野郡丹後町竹野古馬場・中田上ほか	包含層		散発的	畿内産土師器
2	遠所遺跡	京都府竹野郡弥栄町木橋遠所	包含層		散発的	
3	裾谷遺跡	中郡大宮町字口大野小字裾谷	竪穴式住居	飛鳥Ⅱ	散発的	甑・竈などとセット
4	須代遺跡	京都府与謝郡加悦町明石池田	包含層		散発的	
5	定山遺跡	京都府与謝郡岩滝町弓木定山	竪穴式住居・鍛冶関係遺構・包含層	飛鳥Ⅱ	SX02では主体的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
6	荒木野遺跡	京都府宮津市今福荒木野	包含層	奈良時代？		
7	志高遺跡	京都府舞鶴市志高	掘立柱建物・竪穴式住居・包含層	奈良時代	主体的	
8	桑飼下遺跡	京都府舞鶴市桑飼下	包含層			
9	桑飼上遺跡	京都府舞鶴市桑飼上	竪穴式住居・土器溜まり・包含層	奈良時代		
10	高川原遺跡	京都府加佐郡大江町南有路赤穂	竪穴式住居	飛鳥Ⅱ	主体的	
11	三河宮の下遺跡	京都府加佐郡大江町三河高畠	竪穴式住居	飛鳥Ⅱ？	主体的	
12	石本遺跡	京都府福知山市牧、石本	溝（大溝）	ＴＫ10～飛鳥Ⅱ	散発的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
13	奥谷西遺跡	京都府福知山市宮奥谷	包含層			
14	青野遺跡	京都府綾部市青野	竪穴式住居・土坑・包含層	飛鳥Ⅱ～	主体的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
15	青野南遺跡	京都府綾部市青野	豪族居館・官衙・竪穴式住居	飛鳥Ⅱ～	主体的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
16	綾中遺跡	京都府綾部市綾中	竪穴式住居・包含層・溝	飛鳥Ⅱ～	主体的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
17	綾中廃寺	京都府綾部市綾中堂の元ほか	寺院	飛鳥Ⅱ～	主体的	畿内系土師器杯・甑・鍋・竈とセット
18	七百石遺跡	京都府綾部市七百石	竪穴住居に伴う溝	飛鳥Ⅱ	散発的	甑を共伴
19	長遺跡	京都府綾部市新庄町	溝・土坑	奈良時代	主体的	
20	高倉遺跡	綾部市西坂町	整地土層	奈良時代	主体的	
21	町田遺跡	京都府船井郡園部町船阪町田	包含層		散発的	
22	八木嶋遺跡	京都府船井郡八木町	豪族居館・初期官衙・包含層		散発的	
23	池尻遺跡	京都府亀岡市馬路池尻	漆工房関連遺構・池尻廃寺と関連	奈良時代	散発的	

主要な遺跡について以下概略を述べたい。

丹後半島では竹野川流域で３遺跡からの「青野型甕」の出土が確認される。下流域では丹後町竹野遺跡包含層出土資料、中流域の弥栄町遠所遺跡群包含層出土資料、大宮町裾谷遺跡ＳＢ04出土資料である。

竹野遺跡(注4)は古墳時代後期から集落が営まれているが、「青野型甕」がどの時期に該当するのかは不明である。

遠所遺跡群(注5)は飛鳥時代と考えられる製鉄炉が確認されているほか、古墳時代後期(ＭＴ15)以降、継続的に営まれた谷集落である。奈良時代には製鉄炉・鍛冶炉のほか、須恵器窯も営まれている。「青野型甕」の出土状況については詳細不明であり、報告書の刊行を待って再度検討したい。

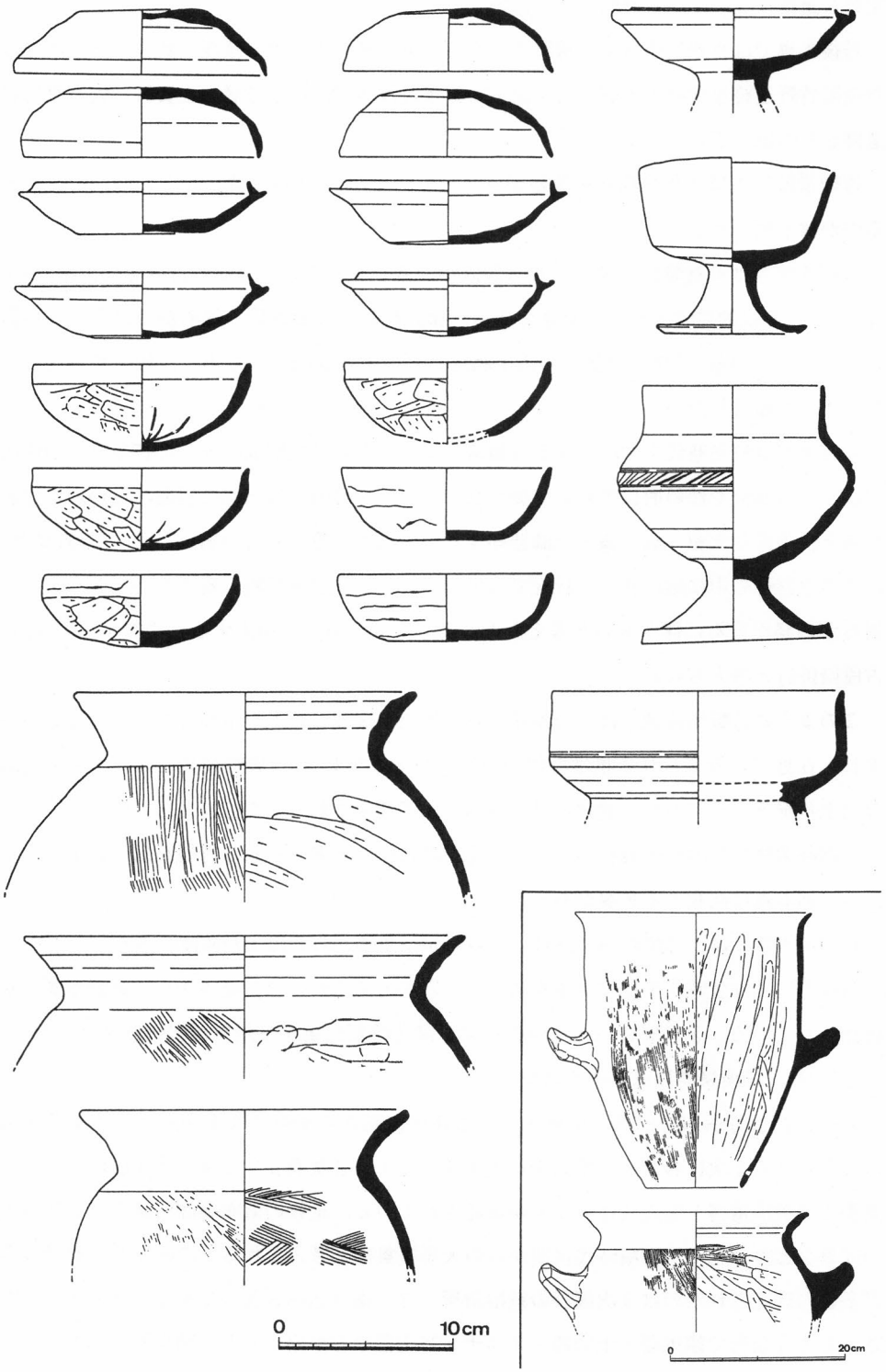
裾谷遺跡(注6)は飛鳥時代を中心とする谷集落である。極めて短期間のうちに17基以上の住居が小さな谷部分や傾斜面に密集して築かれている。ＳＢ04は谷上部の斜面に築かれた住居であり、須恵器大甕・甑・竈・土師器杯などが床面上に重なり合い出土した。「青野型甕」はこの土器群の中に細片化した状況で含まれており、住居廃絶時に残されたというよりは何らかの祭祀行為に伴うものと考えた方がよさそうである。伴出する土器群からＴＫ217古段階併行と考えられる。

このように竹野川流域では一般集落からの出土が確認されるが主体となる土師器甕はいずれも在地産と考えられる粗雑な作りのものが主体であり、「青野型甕」は極めて散発的な出土状況を示しており、通常の日常雑器として使用されていたものとはいいがたい。また、裾谷遺跡ＳＢ04出土資料のように祭祀行為に伴うと考えられる特異な出土状況を示すものがある点は注意する必要がある。

野田川流域では、加悦町須代遺跡、岩滝町定山遺跡からの出土が確認できる。

須代遺跡(注7)は弥生時代中期の環濠集落として著名であるが、包含層中から「青野型甕」が確認されている。包含層には古墳時代後期以降各時期に属する須恵器が確認されており、「青野型甕」の所属時期は明確ではない。

定山遺跡(注8)は野田川河口部に位置する古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする集落である。これまで４次にわたる発掘調査が実施され、１・２次調査では竪穴式住居群が、３次調査では鍛冶遺構と竪穴式住居などが確認されている。遺物の散布範囲や第１・２次調査の成果などから見て、古墳時代後期からの大規模集落と考えられる。このうち「青野型甕」が多量に確認されたのは３次調査の鍛冶遺構に伴う掘り込みＳＸ02である。その中に投棄されたような形で須恵器・土師器・ミニチュア土器などが出土した。須恵器の形態からＴＫ217古段階併行期に比定される資料である。出土遺物中には、須恵器杯身・杯蓋のほか、



第３図　定山遺跡ＳＸ02出土土器実測図(注１より転載)

高杯・瓻・提瓶・壺類・台付椀など、土師器には「青野型甕」のほか、杯・甑・壺・鉢・在地系甕などが存在する。注目すべきは、在地系甕に対し、「青野型甕」の方が量的にかなり多く主体的となっている点である。また、杯には胎土こそ異なるが、稚拙な暗文を施すものが含まれる。これは遺構こそ異なるものの近接して検出された竪穴式住居から、暗赤褐色の畿内産土師器が検出されており、その模倣品と考えられる。他の遺構からは床面上出土遺物が少なく甕の状況は不明である。この鍛冶関連遺構の遺物の出土状況は土器の廃棄場と考えるよりは、遠所遺跡群の炭窯の前庭部で見られたような祭祀行為に伴うものと考える。ただし、近接する地点で行われている第１・２・４次調査では在地系の甕の方が多く、「青野型甕」が主体的な位置を占めるのはこのＳＸ02のみである。

阿蘇海南岸では宮津市荒木野遺跡[注9]から包含層資料として多量に出土している。出土状況などが明らかでないため時期の決定は困難であるが、奈良時代に属する可能性が高い。

由良川流域では「青野型甕」を出土する遺跡は14遺跡が確認できる。丹後地域と比べ、量的にも多く、さらに増加していくものと思われる。

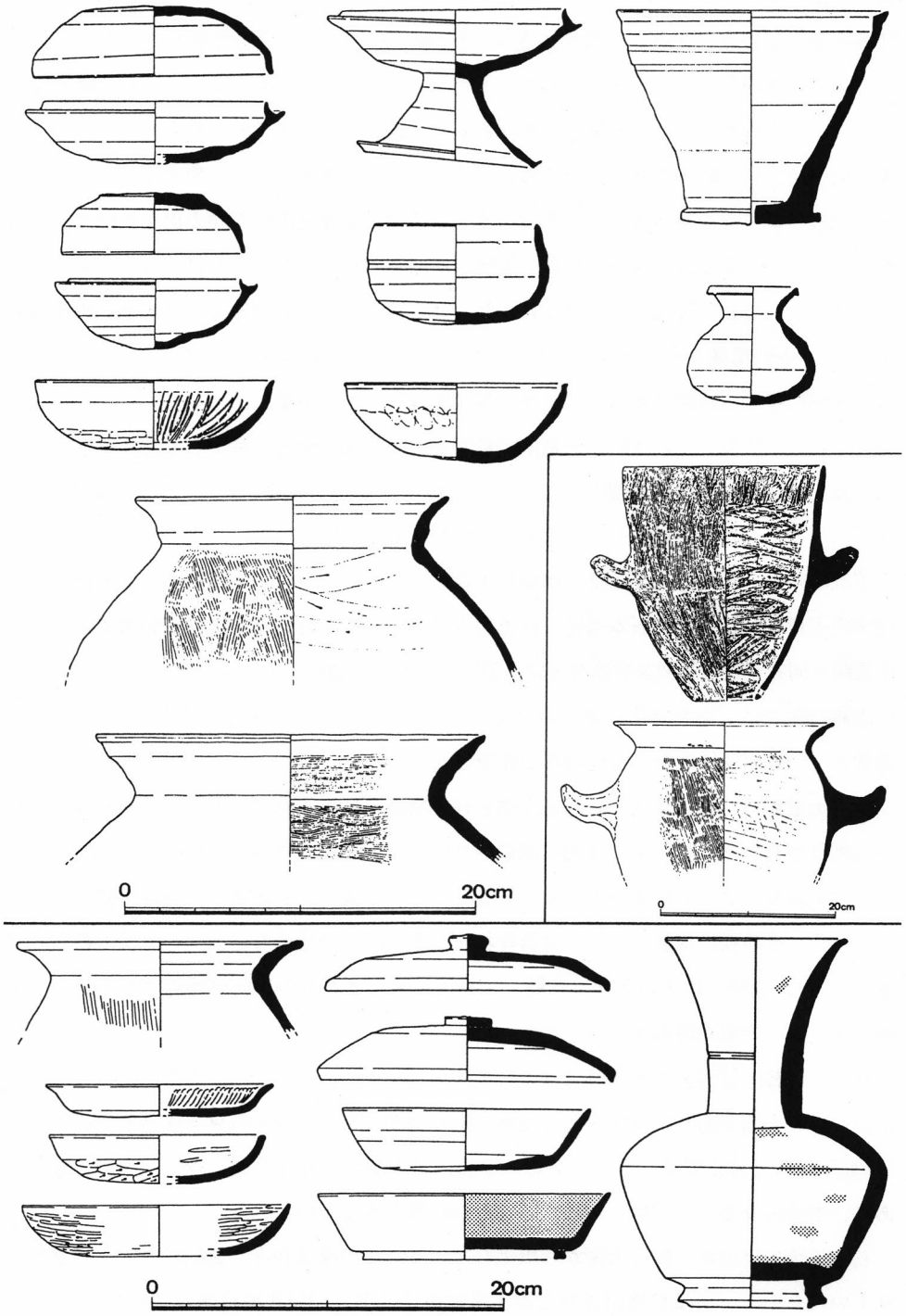
下流域から、舞鶴市志高遺跡[注10]・同桑飼下遺跡[注11]・同桑飼上遺跡[注12]・大江町高川原遺跡[注13]・同三河宮の下遺跡[注14]・福知山市石本遺跡[注15]・同奥谷西遺跡[注16]・綾部市青野遺跡[注17]・同青野南遺跡[注18]・同綾中遺跡[注19]・同綾中廃寺[注20]・同高倉遺跡[注21]・同長遺跡[注22]・同七百石遺跡[注23]などをあげることができる。

志高遺跡では、奈良時代に属すると考えられる包含層、竪穴式住居から出土している。遺構としては同時期の掘立柱建物群が確認されている。

桑飼上遺跡では奈良時代の官衙的な掘立柱建物群が検出されている。この建物群は大形方形掘り形を持ち、極めて計画的に配置されている。また、ほぼ同時期の竪穴式住居も確認されており、竪穴式住居18からは平城Ⅲないし Ⅳ期併行の須恵器と「青野型甕」が共伴している。その他の住居については遺存状況が悪く遺物の組成などについては不明な点が多い。「青野型甕」はこのほか包含層、土器溜まりなどからの出土が確認されるが、一括性に乏しく、明確な時期決定はできない。

高川原遺跡・三河宮の下遺跡では竪穴式住居に伴って出土しているが伴出土器など詳細については不明であり、時期比定の根拠に乏しいが、その形態から見る限り古いタイプの「青野型甕」と考えて良さそうである。なお、同時期の「青野型甕」以外の甕は未確認であり、主体的な甕として用いられていたものと考えることができる。

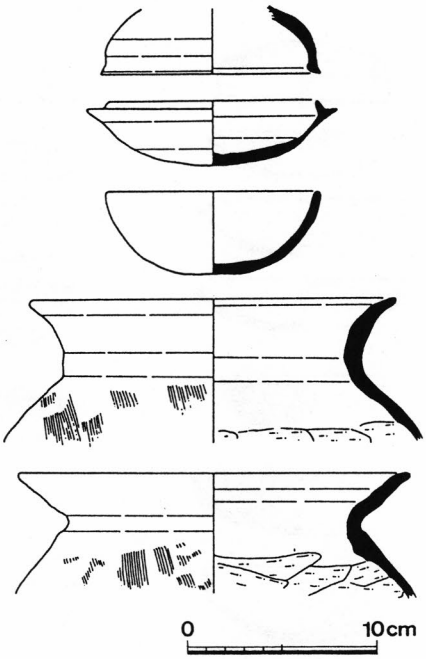
石本遺跡では集落に伴う大溝から出土している。この溝はかなり長期にわたって使用されていたらしく、多量に検出された出土遺物中にはＴＫ10型式併行期のものからＴＫ217古段階併行期のものまでが認められる。「青野型甕」はＴＫ217古段階併行期に属すると考えられ、畿内産土師器杯・竈・甑などが共伴している。ただし、先述の通り一括性の低い



第４図　石本遺跡大溝出土遺物実測図(上段)
池尻遺跡ＳＸ01出土遺物実測図(下段)
上段:注15、下段:注30より転載

資料のため、「青野型甕」が主体的に使用されていたものかどうかは不明である。

青野遺跡は由良川中流域に所在する大規模集落であり、青野遺跡・青野南遺跡・綾中遺跡・綾中廃寺は極めて近接して存在し、青野・綾中遺跡群と呼称され[注24]、ＴＫ209併行期から飛鳥時代を中心にすでに70棟にも及ぶ竪穴式住居が検出されており、由良川中流域の拠点的な集落と考えてよい集落である。青野南遺跡では規則的に配置された大形方形掘り形をもつ掘立柱建物群がある。この建物は主軸方位から４群に分類され、豪族居館もしくは初期官衙施設と考えられている。綾中廃寺は伽藍配置こそ明らかにされていないものの、瓦積み基壇状の遺構が検出されているほか、飛鳥Ⅲ期には伽藍配置の計画などが進められていたと考えられている。このように、飛鳥時代中頃には初期官衙施設と飛鳥寺院を中心とした大規模集落が存在している。



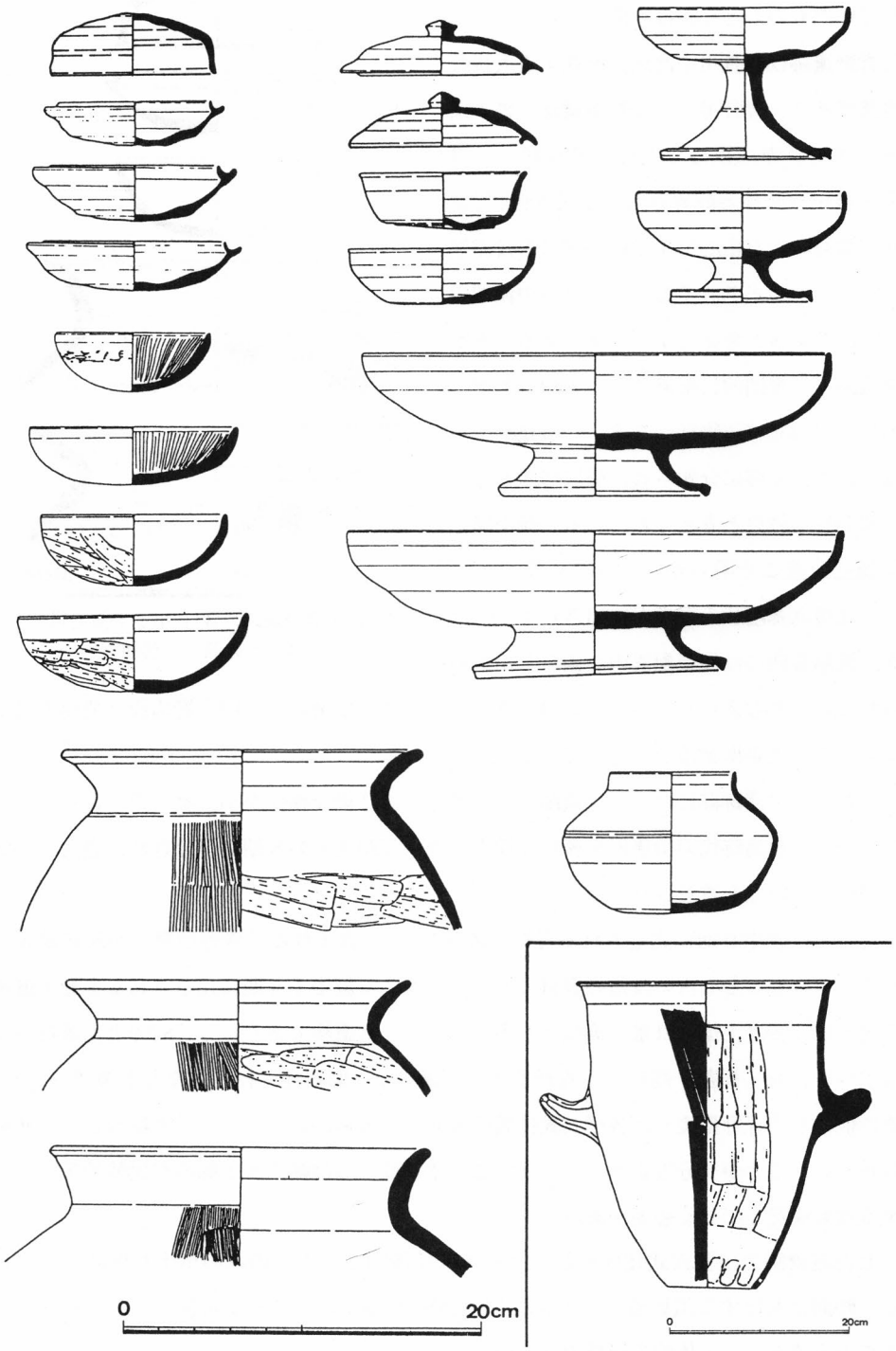
第５図　青野遺跡ＳＢ117出土土器実測図
注17kより転載、一部加筆

青野・綾中遺跡群については遺跡・出土須恵器の詳細な検討が小山雅人氏により加えられており、飛鳥時代の須恵器を綾中０期から綾中Ⅳ期までの５期に区分され、畿内との併行関係についても言及されている[注25]。

現状では綾中０期に比定される青野遺跡ＳＢ117[注26]に含まれる「青野型甕」が現在確認される中ではもっとも古い段階の資料である。後続する綾中Ｉａ期に比定される青野南遺跡土坑ＳＫ8209出土遺物[注27]は量・器種とも多く良好な一括遺物である。ＳＫ8209出土遺物中には須恵器杯身・杯蓋・高杯・「青野型甕」・畿内産土師器杯・杯・甑などが確認される。その他にも「青野型甕」は各竪穴式住居の床面から普遍的に出土し、日常雑器として使用されていたことが充分推定される。またこの遺跡群からは畿内産土師器が比較的多く出土する点も注意しておく必要がある。

七百石遺跡では竪穴式住居を取り囲むような溝内から１点のみの出土が確認されている。時期は共伴する須恵器からＴＫ217古段階併行期におくことが可能である。量的には１点のみであり、主体的な器種ではない。

高倉遺跡では緩斜面の掘り込みＳＸ11から多量の奈良時代の須恵器に伴い「青野型甕」



第６図　青野南遺跡ＳＫ8209出土遺物実測図
注18bより転載、一部改変

が出土している。ここでも「青野型甕」は主体的な位置を占めている。

南丹波地域では大堰川流域で3遺跡からの出土が確認される。上流から園部町町田遺跡[注28]・八木町八木嶋遺跡[注29]・亀岡市池尻遺跡[注30]である。

町田遺跡は包含層からの出土であり、数点の破片のみが出土しており主体的ではなく、時期の決定も困難である。

八木嶋遺跡は初期官衙もしくは豪族居館と考えられる大形掘立柱建物群が検出されている。「青野型甕」は包含層中から少量が出土している。

池尻遺跡は奈良時代寺院[注31]に近接した地点の調査により、漆関連遺物とともに土坑中に投棄された状況で出土している。共伴する須恵器から平城宮Ⅰ期に比定されている。この土坑中から1点のみ出土しており、近接する寺院(池尻廃寺)からは出土しておらず、主体的なものではない。

4.「青野型甕」の出現と波及

以上、「青野型甕」が確認される遺跡について概観した。これらの遺跡の分布をみてみると「青野型甕」を主体的な甕として使用している遺跡は由良川中流域それも綾部市域に集中していることが読みとれ、飛鳥時代の主体的な煮沸具として存在する。また、丹後半島で出土する「青野型甕」の胎土と在地的な甕の胎土は明らかに異なり、他地域から搬入された土器と考えることができる。以上の諸点から「青野型甕」は由良川中流域で生み出された甕と考える。

「青野型甕」の出現時期については、青野遺跡ＳＢ117の年代の示すように、綾中０期には出現しているものと考えられる。綾中０期は小法量の杯Ｈを主体とし、杯Ｇ・Ｂを含まない段階と考えられるのでＴＫ217古段階に併行するものと考える。後続する綾中廃寺ＳＫ04や青野南遺跡土坑ＳＫ8209の年代が示す綾中Ⅰａ期にはほぼ普遍的に竪穴式住居出土遺物として確認され、青野・綾中遺跡群ではすでに主体的な煮沸具として使用されているものと考えられる。ただし、一括資料ではなく包含層出土資料ではあるが青野遺跡の発掘調査において青野Ⅱ期とされる資料の中に「青野型甕」が含まれており、さらにこの甕の出現時期が遡る可能性のあることを示唆している。このように、「青野型甕」は少なくとも飛鳥Ⅱ期には出現し、日常的煮沸具として普及したものと考える。

「青野型甕」の他地域への波及の状況をみてみると、由良川中流域では飛鳥Ⅱ期にはすでに飛鳥時代集落で出土が確認され主体的な煮沸具として使用されている。やや下流域の大規模集落である石本遺跡でも同時期に一定量の搬入は行われている。野田川流域では定山遺跡に多量に検出された。定山遺跡は先述の通り、海岸に面した大規模な集落であり、

由良川から日本海を通じての交流があったものと推定される。この２つの大規模集落における「青野型甕」の出現時期はいずれも小法量の杯Ｈが出現している時期に当たる。この２遺跡では返りを持つ杯蓋は出現していないが、金属器模倣と考えられる椀が出現していることからＴＫ217古段階に置くことができ、綾中Ｉ期に対応する資料であると考える。このように石本・定山の２遺跡では由良川中流域で「青野型甕」が主体的な位置を占めることと対応して一定量の搬入がなされている。その他の地域では包含層出土遺物など状況が不明なものが多いが概して出土量は希少であり、一定量の搬入が行われていたとは考えにくい。以上のように「青野型甕」は由良川中流域から河口域、そして野田川河口域にまで一気に分布範囲を広げているがその搬入の状況は極めて不均衡なものであり、大規模集落を中心に搬入されたものと考える。

また、この段階の青野・綾中遺跡群、石本遺跡、定山遺跡における土師器の組成に着目してみるとまず、３遺跡とも竈・甑・把手付甕・畿内産土師器杯が含まれることが注目される。甑はいずれも底部を全てくり抜き、底部側面に一対の円孔を設け牛角状把手をもつタイプのものが３遺跡から共通して出土している。また、把手付甕も「青野型甕」に牛角状把手を付すタイプのものである。畿内産土師器については暗赤褐色の胎土に暗文を有するもののほか、畿内産土師器を模倣したと考えられるものの２者が存在し、これも共通する要素であるといえる。

このようにこの３遺跡では土師器の組成において、在地産の伝統的な土師器を除けば極めて強い共通点を有していると考えることができる。また、「青野型甕」の出土状況を見てみると、石本遺跡では大溝内に投棄された状況で、定山遺跡では鍛冶遺構に投棄された状況で出土しており、両者とも須恵器高杯・壺類・甕などを伴い、破棄されたというよりは祭祀に使用されたものと考えられ[注32]、集落内で「青野型甕」が特異な位置を占めていたと推測することができる。竹野川流域の裾谷遺跡でも畿内産土師器こそ伴わないものの、「青野型甕」・竈・甑・須恵器壺・甕類が住居跡内に投棄された状況で出土している。青野・綾中遺跡群でも青野南遺跡土坑ＳＫ8209のように同様の祭祀が行われていたことを示す資料が存在している。

同時期の畿内産土師器の分布状況について概観すると、飛鳥Ｉ期に属する畿内産土師器を出土した遺跡は京都府北部では未確認である。飛鳥Ⅱ期以降になると由良川中流域では畿内産土師器は比較的普遍的に出土する。一方、丹後半島ではこの段階で畿内産土師器を出土する遺跡は極めて限られており、現在のところ、定山遺跡をあげられるにすぎない。竹野川流域における畿内産土師器の出現はさらに遅れるようであり、現在のところ、飛鳥Ⅲ期を遡る資料は確認できない。竹野川流域における、「青野型甕」の出土は先述の通り

非常に散発的であり、畿内産土師器と「青野型甕」の分布・出現の傾向と一致する。

畿内産土師器を普遍的に出土する青野・綾中遺跡群内には初期官衙施設と考えられる大形掘立柱建物群や飛鳥寺院が存在し、飛鳥時代の中核的な集落としての機能を持っていたものと考えられ、畿内と密接な関係を持っていたものと考えることができる。

このような、畿内と密接な関係をもつ先進的な地域である青野・綾中遺跡周辺で発生した「青野型甕」という特殊な器種は畿内産土師器や竈・甑とともに由良川流域から野田川流域まで移動している。また、先述の通り、単にものの移動のみにとどまらず、畿内産土師器・「青野型甕」・甑・竈を用いた祭祀形態の波及も同時になされている。

古墳時代の墓制に表出される社会体制の終焉・変革時期に当たり、青野・綾中遺跡群は新しい政治体制を確立するための地方の拠点として畿内と密接な関係にあったものと考えられる。定山遺跡・石本遺跡もまた、当該期における拠点的な集落として同様の意義を与えられていた可能性が考えられる。

このように「青野型甕」の移動は単なるものの移動ではなく、背景に何らかの政治的意図があったものと考えたい。

5．おわりに

以上、これまで俗称「段々口縁甕」と呼ばれてきた土器を「青野型甕」と呼称し、その実態について検討を加えてきた。その結果、「青野型甕」は以下のような特色を持つことを確認した。

①「青野型甕」は由良川中流域(特に綾部市青野・綾中遺跡群)で発生した土器である。

②「青野型甕」の出現時期は現在のところＴＫ217(古)段階・飛鳥Ⅱ期に求めることができる。

③「青野型甕」は由良川中流域では７～８世紀を通じて日常集落で主体的な甕として使用されている。

④「青野型甕」は飛鳥Ⅱ期に丹後半島野田川流域まで把手付甕・甑・移動式竈・畿内産土師器とともに移動している。

「青野型甕」と畿内産土師器の波及が行われた飛鳥Ⅱ期は林部均氏(注33)の研究にあるように第１回目の畿内産土師器拡散段階に当たる。ただし、これらの畿内産土師器がどのような形で地方に拡散していったかという過程については不明な点が多い。今回のケースでは地方の中核的集落(青野・綾中遺跡群)を拠点としてさらに遠隔地の大規模集落(定山遺跡・石本遺跡)への拡散が行われたと考える。他地域でも、同様の在地系土師器を対象とした検証を通じ、畿内産土師器の伝播経路などについて考えていく必要があると思う。

なお、本稿を執筆するに当たり、多くの方々から、協力・ご教示を頂いた。なかでも、京都府北部の両丹考古学研究会の会員の皆様にはさまざまな方面で協力をしていただいた。記して謝意を表します。

（いしざき・よしひさ＝兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

注１　石崎善久「定山遺跡第３次」（『京都府遺跡調査概報』54　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993）

注２　渡辺誠他『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』（舞鶴市教育委員会　1975）

注３　このほか、青野・綾中遺跡群では、甑・竈の口縁部にも「青野型甕」の技法が使用されているものがある。

注４　奥村清一郎・吉田　誠「竹野遺跡」（『京都府丹後町文化財調査報告』３　丹後町教育委員会　1987）

注５　資料を実見

注６　筒井崇史「裾谷横穴・遺跡」（『京都府遺跡調査概報』65　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994）

注７　佐藤晃一「須代遺跡」Ⅲ（『加悦町文化財調査概要』　加悦町教育委員会　1994）

注８　ａ堤圭三郎「定山遺跡発掘調査報告書」（『岩滝町文化財調査報告書』3　岩滝町教育委員会　1979）

ｂ堤圭三郎・大槻真純「定山遺跡発掘調査報告書」（『岩滝町文化財調査報告』4　岩滝町教育委員会　1980）

ｃ石崎善久「定山遺跡第３次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』54　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993）

ｄ黒坪一樹「定山遺跡第４次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』66　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995）

注９　ａ堤圭三郎「宮津・河守間遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1969　京都府教育委員会　1969）

ｂ堤圭三郎・林和廣他「宮守線路線地域内遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1971　京都府教育委員会　1971）

ｃ京都府立丹後郷土資料館『丹後郷土資料館収蔵資料目録』１（京都府立丹後郷土資料館　1980）

注10　肥後弘幸・岩松保ほか「志高遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』12　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989）

注11　注２に同じ

注12　細川康晴・岸岡貴英ほか「桑飼上遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』19　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993）

注13　中谷雅治他「高川原遺跡発掘調査報告書」（『大江町文化財調査報告』1　大江町教育委員会　1975）

注14　ａ竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-2　京都府教育委員会　1981）

b 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982)

注15 辻本和美・竹原一彦・小橋拓司「石本遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』8 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)

注16 藤原敏晃「奥谷西遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』10 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988)

注17 a 鈴木忠司・釋龍雄・山下潔美他「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』2 綾部市教育委員会 1976)

b 増田信武・中谷雅治・中村孝行他「青野遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』3 綾部市教育委員会 1977)

c 中谷雅治・中村孝行他「青野遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告書』4 綾部市教育委員会 1978)

d 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告書』8 綾部市教育委員会 1981)

e 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』9 綾部市教育委員会 1982)

f 増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』6 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983)

g 小山雅人・辻本和美「青野遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』6 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983)

h 辻本和美・森下衛「青野遺跡第9次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』18 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986)

i 中村孝行「青野遺跡第10次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』14 綾部市教育委員会 1987)

j 引原茂治・森下衛「青野遺跡第11・13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』30 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988)

k 中村孝行「青野遺跡第12次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』15 綾部市教育委員会 1988)

l 近沢豊明「青野遺跡第14次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』17 綾部市教育委員会 1990)

注18 a 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』9 綾部市教育委員会 1982)

b 中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」(『京都府綾部市文化財調査報告』10 綾部市教育委員会 1983)

c 中村孝行「青野南遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』13 綾部市教育委員会 1986)

d 近沢豊明「青野南遺跡第6次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』17 綾部市教育委員会 1990)

注19 a 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』9 綾部市教育委員会 1982)

b 近沢豊明「綾中遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』17 綾部市教育委員

会　1990)

注20　ａ中村孝行・小山雅人「綾中廃寺跡第１次・第２次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告書』8　綾部市教育委員会　1981)

ｂ中村孝行「綾中廃寺跡第３次発掘調査概報」(『京都府綾部市文化財調査報告』10　綾部市教育委員会　1983)

注21　森　正・近沢豊明「高倉遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1994　京都府教育委員会　1994)

注22　近沢豊明「長遺跡」(『綾部市文化財調査報告書』21　綾部市教育委員会　1995)

注23　尾崎昌之「七百石遺跡」(『京都府遺跡調査概報』62　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995)

注24　中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』3　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1982)

注25　小山雅人「丹波綾中廃寺の創建年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

注26　注17ｋに同じ

注27　注18ｂに同じ

注28　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員　森下　衛氏のご教示による。

注29　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員　田代　弘氏のご教示による。

注30　田代　弘「池尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』48　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992)

注31　柴　暁彦「池尻遺跡第２次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』58　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994)

注32　竈を用いた祭祀に関する研究として以下のものがあげられる。
稲田孝司「忌みの竈と王権」(『考古学研究』25-1　考古学研究会　1978)

注33　ａ林部　均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学雑誌』72-1　日本考古学會　1986)

ｂ林部　均「律令国家と畿内産土師器　－飛鳥・奈良時代の東日本と西日本－」(『考古学雑誌』77-4　日本考古学會　1992)

ｃ林部　均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』39-3　考古学研究会　1992)